

# ヤヌシュ・コルチャックの子ども・教育思想の歴史的形成 (1890-1920 年代)

— “子どもを人間として尊重する” 思想の形成を中心に —

塚 本 智 宏\*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

**【要旨】** 本論は、ヤヌシュ・コルチャック (1878-1942) の子ども・教育思想の歴史的形成過程を解明することを目的としている。ここでは、彼の思想形成の出発点に位置する 1899 年の論文「19 世紀隣人愛思想の発展」執筆の歴史的背景と彼自身の執筆動機に焦点をあてて解明を試みている。本論は、ポーランド全体が子どもという存在に注目するその歴史的土壌に触れながら、彼がペスタロッチ、フレーベル、スペンサーらの思想から子どものなかの「人間」と「自然」を探究する姿勢と方法を学び、それを生涯におけるコルチャックの子ども研究の中心にすえたと仮説している。この論文で始めて表明される「子どもはすでに人間である」という彼の信念は生涯ゆらぐことはなかった。こういった信念・思想は、彼がその救済・保護を自らの課題として課すことになった子ども達—それは彼の目の前で増大するワルシャワの通りの孤児たちに向けられたものだった。

**キーワード：** Janusz Korczak、コルチャック、子どもの権利、自然と人間、子どもの尊重

## はじめに：本研究の課題

本研究の基本的な課題は、ヤヌシュ・コルチャック (1878-1942) の子ども・教育思想について、その特質を“子どもを人間として尊重する”思想として、その思想の歴史的形成過程を解明することにあるが、本論ではこの思想が生涯を貫いたものと仮定して、その萌芽を考察することを目的とする。具体的には、“子どもと教育”のことを自らが考えるべき問題として意識しはじめたギムナジアから大学生の時代のコルチャックは、①どのような書物・思想に接して、“子どもと教育”に関するどのような思想を、またそれらにアプローチする方法を手にしようとしていたのか、②またほぼ同時に、彼が直面していた当時の子ども・教育の具体的問題状況というのはどのようなものであり、彼はどのようなことを自らの課題にしようとしていたのか、これらの点について主に「19 世紀隣人愛思想の発展 (1899)」という彼の小論が生まれる歴史的背景とその内容の検討を通じて明らかにしてみたい。さらに③この作業を通じて、彼の思想と先行するヨーロッパ教育思想家との関係また同時代の新教育とはどのような位置関係にあったのかをあわせ考察することとする。

以下、Ⅰ. 「子どもはすでに人間である」、Ⅱ. 先行する子ども・教育思想家、あるいは、「子どもの発見者」、Ⅲ. 子どもの人間としての尊重の思想と子ども研究の方法的態度、Ⅳ. 子どもの歴史具体的問題状況、の順で考察をすすめるが、その前にこの時期の若きコルチャックがその思想形成をはかつていくその歴史的土壌について若干述べておきたい。

世紀転換のこの当時の植民地下ポーランド社会の言論は、著名なポーランド文学史家ミウォシュによれば、一般に「被抑圧者のための平等な権利擁護の手」が農民のみならずユダヤ人や女性にまで及ぼされる状況に至っており、ポーランド実証主義の「社会的公正」や「弱者保護」を求める「自由な態度」がコルチャックにも影響を与え<sup>1)</sup>ていたという。将来この延長線上でコルチャックがはっきりと被支配民族・階級また女性と並んで子どもの「解放」にまで言及するに至る<sup>2)</sup>がその一歩手前の状況にあったということである。つまり社会的あるいは人間的な存在としての子どもへの注目やその権利擁護の着手まではあと一歩という地点に来ていたのであり、彼が(本論で考察する)論文「19 世紀隣人愛思想の発展」のなかに「貧しい人々」や「女性たち」と並んで「子どもたち」を登場させる歴史的な土壌はすで

2010 年 11 月 1 日受付：2011 年 1 月 24 日受理

\*責任著者

住所 〒 096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail : tukamoto@nayoro.ac.jp

にあったということである。これがまず第一の点である。

第二の点は、世紀転換期ポーランドで急速に進行するその「子ども」への関心である。当時のポーランドは周囲三国の植民地下にあってそれに抗するために、自国の言語や文化を秘密裏の学校網を通じて広く将来のポーランド人である子どもたちに普及しようとする動きがきわめて活発であった<sup>3)</sup>。さらに、そういった教育普及に貢献する社会評論家や作家のなかに女流作家・詩人が登場してくるが、例えばその一人 M. コノプニツカは「詩人としてよりは解放された女性の手本」(ミウォシュ)として有名であり「人民派」詩人として評価されるそういった人物であった<sup>4)</sup>が、彼女の作品と同様<sup>5)</sup>、当時の文学作品では子どもやその世界がヒーロー・主舞台となることが少なくなかったという<sup>6)</sup>。さらに文学のみならず、芸術の世界(例えば“子ども発見”を試みた S. ヴィスピアンスキ<sup>7)</sup>)にも、子どもへの関心が表れていた。まさにこういった時期に先の教育普及を直接・間接に支えるダヴィドらの児童心理学研究<sup>8)</sup>が生まれていた。コルチャックが子どもに強い関心を寄せはじめる当時の具体的歴史状況は、これらといずれも関係が深いが、彼自身の固有の動機を本論で検討することになる。いずれにしろここでは、思春期に文学に接したコルチャックが「子どもの研究」へと向かう土壌が確かにあったし、さらに広いステージへと上る土壌も存在したということを確認しておきたい。

## 1. 「子どもはすでに人間である」

「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である。そう、人間なのであって操り人形なのではない。彼らの理性に向かって話しかければ、我々のそれに応えることもできるし、心に向かって話しかければ、我々を感じとってもらえる。子どもは、その魂において、我々がもっているところのあらゆる思考や感覚をもつ才能ある人間なのである。」<sup>9)</sup>

この「19世紀隣人愛思想の発展」の「子どもたち」の章の冒頭の文章、「子どもはすでに人間である」は、A. レヴィン (A. Lewin, 1915-2002) によれば、コルチャックの基本的な教育概念であり、これがその後の彼の子どもに関わる見解のうちにしばしば現れる最も重要なテーゼであること<sup>10)</sup>はほぼ共通の認識になりつつある。とくに子どもの人権・権利といったテーマに関わる点での研究は、この文章を起点とし

なければならないだろう。しかしこの最初から論争的な子どもの定義は、いったいどこから来たのか、だれと議論しようしているのか。これらの点については、レヴィンにしても何も触れてはいない。

今いくつか指摘できることは、第一に、子どもと人間を結びつけて議論をするということについては以下に見るとおり、彼が学ぶ先行の思想家がいたということ、第二に、しかし、「すでに人間」との定義は彼固有のものでありこれは出所が不明である。第三に、それはしかし、コルチャックの文章を読むなら、当時の(また我々の現代の)社会的通念としての子どもに対する態度や観念への明確な批判を意図したものだという点である。第一の点は後述するとして、第二の点についてさらにいえば、引用後半の文章に窺えるように、子どものなかにあるいわば人間的な「理性」や「心」に働きかけることではじめて見えてくる、つまり、彼の経験的な直感によって得た認識なのかもしれない(ポーランドの研究者ヴィンチツカはそう述べていた)。

第三の点について述べる。「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である (Dzieci nie będą dopiero, ale są już ludźmi)。そう、人間なのであって操り人形なのではない」。この文章を定式化した次の年に、この定式を別の角度から説明しようとする以下のような文章を書いている。

「子どもは、人間をめざして、また、尊重に値する生きものをめざしてそうなるものだといわれる。皮ひもの先に立つことは許されないが、その巧みな捌きをもって、慎重に、知性と感覚と意思の全力をもって操られるべきそういった生きものののだと…」<sup>11)</sup>

(“子どもと教育”雑誌連載記事論文、) Wędrowiec (旅人) 1900 年

子どもは「人間をめざして」大人の操作によってようやく人間になっていくのであり、そうして初めて「尊重に値する」存在になりうる、すなわちそれまでの子どもとは人間以前の存在だというのが通常の大人の認識であり、彼はこれを根底から批判しようとしたのである。この「すでに人間」(これはすでに尊重されてしかるべきとの意味を含む)という子どもに関する彼固有の基本テーゼは、彼の個人的な経験の限界を越えて、それが意味するものまたその場合子どもとはいかなる人間なのか、こういったことについて、広く人々に承認されようよう将来において論証・実証が不可欠の仮説でもあった。

子どもはすでに人間というテーゼは、この後、彼の思想のほぼ中心に位置し続けた。それは、以下に

示すような新たな思想・概念（例えば「今日という日に対する子どもの権利」、あるいは、人間性を構成する一部としての子ども期の人間性、大人らと対等平等に分割されるべき人類の予算配分など）を伴いながら深化、拡張させられていく。1920-21年の二つの文章を、確認のために以下に、引用しておく。

「百人の子どもは百人の人間である。それはいつかどこかに現れる人間ではない。まだ見ぬ人間でもなく明日には現れる人間というわけでもない、いやすでに今人間なのである。狭い世界ではなく世界そのものなのだ。小さな人間でなく偉大な人間。「純粋無垢な」人間ではなく・・・」『子どもをいかに愛するか』（寄宿学校編 14 章 VII-150 1920 年）<sup>12)</sup>

「子どもと青年は第三の人間性であり、子ども時代は人生の第三の部分となす。子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間なのである。

この地球の果実と富のその三分の一は彼らのものだ、それは彼らの権利であって恩恵によって与えられるものではない。人類の思想が勝利を収めた果実の三分の一は彼らのものだ。」<sup>13)</sup>（『春と子ども』1921 年）

## II. 「子どもの発見者」について

次に、彼に先行する子ども・教育思想家と若きコルチャックの思想の関係、あるいは、コルチャックは彼らの思想の何を学ぼうとしたのか、また、何を継承しようとしたのかという点について考えてみたい。彼は先の「隣人愛思想の発展」において次のように述べた。

「ペスタロッチ、フレーベル、そして、スベンサーの名は、19 世紀の偉大な発明者たちの名と比較しても、けっしてその輝きで劣ることはない。彼らは、ますます多くの未知なる自然の力を、また、人間性の未知なる半分を発見してきたのだ。つまり、子どもを発見してきたのだ。」<sup>14)</sup>

「子どもを発見した」というこの三名をコルチャックはどこから引き出して来たのか、にわかにはわからない列挙であるが、関連するもうひとつの文章——こちらはコルチャックによれば「子どもの魂」を見出して来た教育家たちに言及するものだが——をあわせて引用すると見えてくる。

「子どもと青年の訓育と陶冶の領域でその進展はますますはっきりと見られる。コメンスキー、ロック、ルソー、バセドー、ペスタロッチ、フレー

ベル、彼らは子どもの魂をますます見事に明るく照らし出してきたのである。…」 （“子どもと教育” 雑誌連載記事論文）Wędrowiec（旅人）、1900 年、10 号<sup>15)</sup>

実はこれらの教育史上の人物名の列挙については、すでにレヴィンが明らかにしているように、イギリスの教育家、R.H. クイック Robert Quick（1831-1891）<sup>16)</sup>の著書『教育の改革者、最新教育の原理』（1896 年）<sup>17)</sup>からのものである。ポーランドのコルチャック研究の第一人者レヴィンは、この書物がコルチャックにとっていわば教育入門の書であったという主旨のことを述べている。以下に引用する。

「おそらくこれによってコルチャックの目の前で新時代の教育のパノラマが開かれたのであろう。コメンスキー、ロック、ルソー、バセドー、ペスタロッチ、フレーベルが記述され、分析され、彼らの試みや見解の分析から、子どもは、けっして機械的に知識、それもしばしば役に経たない知識によって満たされうる存在なのではない。それは、周囲を感じ、思考し、行動し、ものを創造する生きものと見做されるべきである。しかもそれは、その生きものに特有の世界観や経験と特別の思考方法をもっている、そういう存在だと。そこから現れた基本的な結論とは、つまり、教育というのは、まずもって、子ども期と青年期の固有の特質の徹底的な研究に基づいて行われるべきだということである。それらは、来る彼の活発な教育活動の展開の時期に向かった彼の教育概念の発芽であった。」<sup>18)</sup>

今後のコルチャックの進むべき教育学の方向として概して言えばレヴィンの言うとおりであるが、クイックから今少し厳密な「学び」があったと思われる。この『教育の改革者、最新教育の原理』がその結論部分で、「新教育」はルソーに始まりペスタロッチ、フレーベルらによって準備されてきたとしたうえで、その土台とすべきことは何かということについて——これはレヴィンのいう「子ども期と青年期の固有の特質の徹底的な研究に基づいて」の部分に対応することであるが——、フレーベルの有名な言葉引用しながら、以下のようにもっと厳密に述べている。

「新教育は、“受動的、追隨的”であり、人間の自然の研究に基づかなければならない。われわれがその発達させられるべき能力が何であるのかを確かめることができるときには、われわれはさらにそれらを発達させるところの自己活動をどのように助成するのかということを考究しなければな



らないのである。」<sup>19)</sup>

「人間の自然」は、*natura ludzka* (原典英語版では、*human nature*) である。この点に注目するのは、いうまでもないが「子ども」の章のなかの、未知なる「自然 (*natura*)」の力と未知なる「人間性 (*ludzkość*)」という二つの概念と重なるからであり、これらは、コルチャックによれば、ペスタロッチ、フレーベル、スペンサーら三人が「発見」してきたものだからである。つまりこれらこそ、コルチャックが学び今後に生かそうと考えたことなのである。クイックのこの一文にすべてを学んだとは言わないまでも、子どもの教育を考える際の、そして、まずは子どもを知るための最も重要な鍵概念であった。

そもそも「自然」や「人間 (性)」は、ペスタロッチにしてもフレーベルにしても彼らの教育学にとって最も重要なキーワードであったことはいうまでもない。コルチャックの彼らの原典への接近はなお後のことだった (翻訳本はまだ出ていない) と考えられるが、後述のように彼は学びはじめていた。

さて、先のクイックの教育史のみならず、とりわけポーランドの実証主義者たちの間で必読書であったスペンサー *Spencer, Herbert* (1820-1903) の著作、例えば当然コルチャックも読んでいたであろう『教育論』(ポーランド語版初版は1870年、1884年に第三版)のなかにも同様に注目すべきところがある。同書道徳教育に関する章のやはり結びの部分に位置する以下のような箇所もコルチャックにとって少なからぬ意義をもったはずである。

「すべての複雑な題目のうち最も重要なものに回答しうるために、われわれの子どもの中に、われわれ自身のなかに、さらに、人間全体のなかに気づいているであろうこと、つまり人間の自然やその法則 (*przyroda ludzka i jej prawo*) を、根本のところから認識していかなければならないのだ。道徳的には、我々はいつそう高貴な感情を働かせ、また低級な感情を抑制しなければならない。」<sup>20)</sup>

子どものなかにある「人間の自然」やその法則を認識すること、それは大人にもあるが、スペンサーもペスタロッチやフレーベルと同様のことをコルチャックに語りかけていたのである。

子どものなかに「人間」を見るという態度についてはレヴィンも注目してきたところだが、コルチャックはかなり早くから、子どものなかに「人間の自然」ないし「人間」と「自然」を見るという、子ども研究の課題と方法的な態度をもっていたといつてよい。それは明らかに、ここまで見てきた先行する教育家たちに学んだのである。

### III. 子どもを人間として尊重する思想とその方法的態度 その後の展開 (1918-1939年)

#### ①すでに人間・一個の人格・大人とは異質の人間の証明<sup>21)</sup>

「ただ際限のない無学と見解の浅はかさだけが見落としてしまうことだが、それは、乳児というのは、それ自身、生まれつきの気質と知性の諸力と心身の感覚と生きた経験から成り立っている、ある人格、厳密に言えば、一個の人格である、ということだ。」<sup>22)</sup> (『子どもをいかに愛するか』家庭の子ども編 1918年)

この記述の直後の26章では、章題を「百人の乳児」とし、「人生何週間かあるいは何ヶ月かを数える者たち」の「まなざし」や様子・状態を観察し、乳児の顔にすでに「成熟した人間の精神的風貌」と同様のものが観察されることを示唆している。そして、続くいくつかの章で、詳細で正確な観察によって、乳児がその知性とあらゆる感性を発揮しながら「研究」を重ね、また、常に新たな現実とぶつかり、一歳にもなれば相当豊かな経験を重ねているのだということを確認していく。<sup>23)</sup>

同時に、大人とは異質の人間であることを確定し、その異なる人生、生き方を尊重せよとの要求を明確にしていく。子どもが、大人とは「精神構造」において異なり、経験においては明らかに不足しているが、「知性」において同等だ、しかし、「感性」においては子どもは高位にある (大人が爪先だって立たなければそこに届かないほどだと別の作品で述べている)、そういう構造の異なる人間であることを示している。<sup>24)</sup> 彼はいう。

「子どもがではない。

そこにいるのは、知識の量、経験の蓄積、欲望、感情の動きが異なる人間だ。

私たちが子どもたちを知らないということを覚えておくべきだ。」<sup>25)</sup> (『子どもをいかに愛するか』寄宿学校編 1920年)

#### ②「子どものなかに人間を見る」方法的態度と人間的価値

上記のような子どもを人間として尊重するための彼の論理や論証は、おそらく、子どもに向かうときの方法的態度によっていた。

特に彼の教育学作品のひとつとして注目されるもので、子どもの観察はいかにあるべきかその方法について彼の実践を見せてくれる作品 1919年の『教育の瞬間』のなかに、幼稚園園児ヘルツィアが観察対象である一章がある。ヘルツィアをその周辺の子ど

もたちとのやりとりを含めて、その遊びの日常を観察して記録したものである。その章の終わりに、ほとんど目立たないが、一行、次のように加えられている。

「私が観察したのは、ヘルツィア Helcia ではなく、自然 natura と人間 człowiek の法則（権利）prawo である。」<sup>26)</sup>（『教育の瞬間』三章ヘルツィア 1919 年）

ここには明らかに、先に見た子どもという人間に対するときの同じ方法的な態度が継続されていると見ることができる。

こういった子どもへの観察・アプローチは、1927 年の論文「感性」のなかでは、それは人間を認識するためだと次のように述べてもいる。

「人間を認識すること、すなわち、まず何より子どもを、千通りの方法で研究することだ。別の方法があるのか？私の方法はそれに劣るだろうか。いややはり私はこれでやる。学問的にはなく、家庭でやるやり方で、観察する、肉眼で。」<sup>27)</sup>（1927 年論文「感性」）

彼は単に子どもを知ろうとしていたのではなく、子どもという人間を知ろうしてたのである。人間を知るためには子どもを認識しなければならないという意味である。

こうして、子どもの観察・記録・その表現・提示ということを通じて、彼が目指していたのは一言で言えば、子どもの人間的価値の発見である

『子どもをいかに愛するか』寄宿学校編 14 章では、すでに触れた引用であるが、それに続く文章が彼の望みを率直に表現したものである。

「百人の子どもは百人の人間である。・・・（彼らは）・・・狭い世界ではなく世界そのもののなかだ。小さな人間でなく偉大な人間。“純真無垢”な人間ではなく、奥深くに人間的な価値・美点・特性・欲求・望みをもったそういう人々である。」<sup>28)</sup>

同書同編の、最終章の 85 章で、その前の 84 章で記されているいくつかの条件をクリアーし、多様な子どもたちを受け止めることが可能になり、そういった子ども達に出会うことがひとつひとつ意味を持つと感じられるようになったときに、子どもという人間存在にますます接近できると次のように述べている。

「そのとき初めて、教育者はそれぞれの子どもを理性的な愛情で愛するようになり、子どもの精神的本質、要求、運命に関心を持つようになる。子どもに近づけば近づくほど、教育者は子どもの中に注目すべき特徴をより多く発見する。そして研究の中に報酬と、さらなる研究、さらなる努力

への刺激を見出すだろう。」<sup>29)</sup>（『子どもをいかに愛するか』寄宿学校編 1920 年）

こういった姿勢は、その後も貫かれている。1929 年『子どもをいかに愛するか』の第二版と同時に書いた作品『子どもの尊重される権利』について、その「主たる考え」は、1939 年の『おもしろ教育学』（彼の最末期の作品）の序文に彼自身の率直なコメントがある通り、次のところにあったのだという。

「子どもというものは、我々（大人）と等しく人間的な価値をもっているものだ」。<sup>30)</sup>

また、この 1939 年の著作は、彼のラジオ番組（“オールド ドクターのお話”）での話題をもとにしたものであったが、それについて彼は次のように述べている。

「このラジオ番組のおしゃべりでもうひとつ試みていること。それはおもしろおかしく・・・、こまかいことにこだわらず、好意的に確信をもって、子どものなかに人間を見ることが。けっして軽蔑することなく」<sup>31)</sup>

以上のように、子どものなかの「人間」と「自然」を見るという方法的な態度ないし姿勢は、若き頃よりその生涯において、一貫していたと確認することができる。

### ③子どものなかの「自然」

彼の著作や人生のなかで、子どものなかに「自然」を見るという、彼の子どもに対するときの、強調されてよい、もう一方の方法もずっと維持されていたといつてよい。それは相当厳密な医学の目によるものである。詳細は改めて検討したいが、一点紹介しておく。『子どもをいかに愛するか』（寄宿学校編）の第 79 章に、そこには「自然」の意味するものが明瞭にみえる。それは、自然科学者としてあるいは医者として観察する子どものなかの自然の法則である。

「医学は私に治療の奇跡と、自然の秘密を発見する人間の努力の奇跡を教えてくれた。医者として働きながら、私は何度も、人が死んでいくのを見た。月満ちた胎児が人間になるために、無慈悲な力をもって、母親の腹を痛めながら、生の世界に出てくるのを、何度も見た。医学のおかげで私は、ばらばらの事実や矛盾する症状から一つの論理的な診断を丹念にまとめ上げることを覚えた。そして、自然の法則の力と人間の科学的思考の才能を意識することによって高められた私は、未知なるもの、すなわち子どもを前にして立ち止まっている。」<sup>32)</sup>

#### ④新教育、クラパレードとコルチャック

ところで、ようやくここで同時代のヨーロッパの新教育論者たちとの対比も可能になる。子どものなかに「人間」と「自然」を見るという方法的態度は、他の研究者、新教育論者のなかにも確かに見られるものだからである。例えばクラパレード(E.Claparede)の論文「教育は生活か生活準備か」(1930)が引用する1904年リヨンのリセ教授ブルム報告(「子どもは固有の存在」と規定)で「何よりも子どもを子どものために、ありのままの子どもとして、彼がもっている自然と権利を損なわずに育てることが必要・・・」<sup>33)</sup>との要求やこれを引用するクラパレードの教育観(これは現代ポーランドのクラパレード認識であるが)、すなわち「(クラパレードによれば、教育とは)自然の法則に従ってその人格に到達する自然な過程である」<sup>34)</sup>もコルチャックからすると「自然」のほうにかなり傾斜しているとはいえ、おそらく同じ医者という出自からしての共通の子どもアプローチであろうかと推察される。

また、クラパレードの論文を読むと、20世紀に入ってのコルチャックの議論や彼が利用している概念の多くが、当時のクラパレードが議論しているそれらとかなりの重なりを見せていることがわかる<sup>35)</sup>。コルチャックは注意深く他国の新教育の動向を追っていたといわれその影響について今後さらに詳細に検討すべき課題である<sup>36)</sup>が、少なくともコルチャックがそれらの議論のなかにどっぷりつきながら、同じく“子ども”を知ろうとしていたことは間違いない。<sup>37)</sup>

さらに、コルチャックとクラパレードは、明らかに両者ともにその思想的起源をたどればルソーに行き着くことになる。養育者としての道徳的モデルを求めていたコルチャックがああ『告白』ゆえにペスタロッチのようにルソーを師とは仰げなかったというのがレヴィンの解釈<sup>38)</sup>であるが、他方のクラパレードはルソーを明らかに新教育の一起源としていた。クラパレードの「ルソーと機能主義的子ども観」(1912年)はルソーに学びながら、継承すべき思想を選択し新たな意義づけを行おうとしている論文である。そこでは、現在様々な意味で興味の対象となっている「子ども期」や「子ども観」に関する様々な論点が提示されている。「子ども期」は個体にとって有用だとしながら、「子どもは子どもである限り、子どもとして尊重に値する」ものだという。そしてルソーの言葉をひきながら、次のように述べている。「かくして、それぞれの年齢にあって、子どもは完全な存在である。“各々の年齢、人生の各々

の段階には、それにふさわしい完成があり、それに固有の成熟がある。”・・・子どもは単に未完成のおとな、不完全な、あるいは縮尺のおとなではなく、それ自体独特の存在である。」<sup>39)</sup>ここで述べられている子ども期に関する考え方は、これもほとんどコルチャックの議論と重なるものである。しかしここで注目したいのは、こういった議論を展開しながら、クラパレードがルソーについて、次のように評価している点である。「“子どもの中に子ども”をしっかりと見ることができたルソーは、われわれにたいして…“子どもの生を生きた”子どものことを書いた、いや少なくとも書こうとした」<sup>40)</sup>と。コルチャックがこの文章に仮に触れていたとすれば(おそらく触れていた)、それは自分とは違うと思ったのではあるまいか。彼が子どものなかに見ようとしていたのは、子どもではなく、人間であった。

#### IV. 子どもの歴史具体的問題状況 ユゴー『レ・ミゼラブル』とワルシャワの子どもたち

さて、「19世紀隣人愛思想の発展」を発表した頃、コルチャックが人間としての尊重を求めたその子どもたちとは、具体的にはどのような子どもの存在であったのか。ここでは、世紀転換期のまさにその時点に限定して、彼が考えはじめた“子どもと教育”の歴史具体的な内容を考察してみたい。

##### ①親子関係の変化の兆し、家庭のなかの“孤児”

すでに一部を引用した文章であるが、続く文章をあわせて再度引用する。これは彼が1900年「子どもと教育」というゆるやかな共通テーマで一連の記事を雑誌「旅人」に投稿していた文章のなかのひとつである。

「子どもは、人間をめざして、また、尊重に値する生きものをめざしてそうなるものだといわれる。皮ひもの先に立つことは許されないが、その巧みな捌きをもって、慎重に、知性と感覚と意思の全力をもって操られるべきそういった生きものののだと。かつての専制が教育に生き残っているが、親の前に立つときのかつての恐怖は、時の流れとともに消え去った。彼にはどんな地位がふさわしいのか。

“愛と尊重と信頼だ”と理性は答えた。

“何ひとつない”と無知と軽薄と怠惰は答えた。

そして、家族の間柄にまで、波乱とたるみが侵入した。両親は、子どもの友人か奉公人に成り下がってしまった。権力が入り組み、操作は断念され、子どもは他者の手に委ねられる。



すなわち、子どもに手形を与えよ、施設の職員や男性教師や女性教師、そしてその筋専門の師を与えて、言語や歴史や代数学、また音楽や絵画や歌や踊りを教えるのである。育てるというよりは、子どもの学力を育てるために、金を払うのである。では心は？」<sup>41)</sup>

ここには一般的に言えば、家父長的な親権の後退と近代家族への移行がはじまったその時点のいくつかの変化の兆しが交錯している。「愛と尊重と信頼」による新たな親子関係は可能か？いやそうではない、金を使つての「学力」の育成、家族外の「他者」に教育が委ねられる。

彼らの「心」の教育はだれがするのか、これらの子どもたちは精神的には放置されているのだ。こういった変化のなかにいるのは、過去のコルチャック自身であり、今は有力な収入源であった家庭教師先の裕福な家庭の子どもたちである。こういった子が将来の小説『サロンの子ども』(1904年から執筆)の主人公になる。彼が関心を寄せていた一方の子どもたちはこういった子どもたちであった。

ところで、こういった家庭のなかの不幸な子どもたちに、とはいってももっと深刻な子ども達にはあるが、その彼らにコルチャックは以前から関心を示していた。1894年、つまりギムナジア第6学年のことである。16歳の夏のこと、当時の日記が後に『蝶々の告白』として公刊されることになるのだが、そこにはある夫人との長い談話のことが記されている。(ちなみにこの三日後の日記には、次のような彼の有名な言葉が記されることになる。“資料を集めて研究だ。子どもとは？・・・教育改革者、スペンサー、ペスタロッチ、フレーベル、いつしか自分の名前もその列に並ぶだろうか”<sup>42)</sup>と。彼が子どもと教育問題を考えはじめる契機であったのだろう。)

「8月12日

今日、ヴァンダ夫人と長い間、ピクトル・ユゴーの『貧しき人々』について話していた。子どもの教育のことや、それに、人間の運命と友情について。

・・・親が自分の子どものことを知らないといったことはだれの罪なのか、ドイツの詩人シュピルハーゲンがその本『謎めいた自然』で述べている。“まさに親のいるところで孤児となっている”子どものことが語られている。”<sup>43)</sup>

このピクトル・ユゴーの『貧しき人々』とは、いうまでもなく、『レ・ミゼラブル』のことである。この作品の13章に現れる「少年ガヴローシュ」、その名は、後には主人公ジャン・バルジャンよりも有名になるということがあったらいいが、それは、彼に

親がありながら親たちが子どものことを気にもとめず愛してもおらず、浮浪児として生活せざるをえなくなっていたからであった<sup>44)</sup>。確認するまでもないがそのガヴローシュについて、ユゴーは文中で「父と母とを持ちながらしかも孤児でもある子どもの一人だった」<sup>45)</sup>と記しているとおりでである。コルチャックがヴァンダ夫人と話をしていたのはこの親のいる家庭の「孤児」たちであったと考えて間違いない。これはドイツの詩人シュピルハーゲンも書いているようにドイツでもそうであったという。ポーランドでは、『貧しき人々』は最初1860年代に発表されてすぐに翻訳され、よく知られる作品となっていたが、ギムナジア時代のコルチャックに強い影響を与えたようである。将来彼が書く先述の小説『サロンの子ども』の主人公は「ポーランドの“貧しき人々”のための資料を集める」ことになるのだ。<sup>46)</sup>

1899年、すでに作家としても多くを書き始めていたコルチャックはこの作品の新訳本が出る<sup>47)</sup>とまもなく「貧しき人々、ヴィクトル・ユゴーの小説」と題した紹介文を書いている<sup>48)</sup>(『みんなの読書室』41号10月12日)。その彼の紹介文には、やはり主人公に劣らず重要な登場人物の「通りの子」ガヴローシュの名も出てくるがさらに、注目したいのは、この小説の序章に現れる次のような19世紀の三つの課題である。「フランスの偉大な詩人にして小説家」が提起するその「世紀の三つの課題」とは、「貧しさゆえの人間(hommes)の墮落、飢えによる女性の墜落、暗愚ゆえの子どもの破滅」<sup>49)</sup>である。

これらは、すでに学生となっていたコルチャックの、目の前に広がるワルシャワの街の現実そのものだったのではなかろうか。

## ②「街頭の子どもたち」・「今世紀三つの課題」

以下は、コルチャックがこの紹介文を書いた頃のこと、当時19世紀から20世紀初頭にかけての時期のワルシャワ孤児たちの様子である(Adolf Suligowskiの『文盲の街』1905)。

「どこに(ワルシャワの)足を踏み入れても、貧しい子どもたちが仕事もなくだれの世話もなくさまよっている。誰のものでもない誰も関心をもたないそういった子どもたちだ。至るところみすばらしい子どもの姿を見かけぬことはない、いやワルシャワならどこにでもあつてまるでたくさんの捨てられたつまらないものでもあるかのようだ。そのことに気づかないところはないはずである。ヴィスワ河沿岸の道路沿いや貧しい住民の地区全体に、裸足の男の子や女の子が群れをなして歩き

回っており、考えようとする人間の頭に疑問と不安がよぎる、そこから何が生まれてくるだろうかと。」<sup>50)</sup>

世紀末のワルシャワにおいて、急速に増大してくる貧困と孤児の群れが大学生になったコルチャックの目の前にはっきりと姿を表すようになっていた。1901年に、彼の最初の小説『街頭の子どもたち』が発表される。この街路の子ども達は、コルチャックによれば次のような子ども達であった。

「誕生した天使たちが絶望のために手をくみ、神様が涙を浮かべている、そういう子ども達だ。暗闇が孤児達の懺悔を聞きとっている。この子ども達は、この世のあらゆる苦しみを一身に引き受け、あらゆる苦々しさを経験しているのだ。その名は軍団 (legion) だ。」<sup>51)</sup> (『街頭の子どもたち』1901年)

こういったワルシャワでの子どもたちを対象とする社会事業が1880年代から開始されていたとはいえ満足いくものではなかった。これを中心的に担っていたのはワルシャワ慈善協会であった。この協会のもとに保護所 (7歳未満) や保育園、また、避難者や孤児のための施設、そして、作業室や作業所も、数は少なかったが存在はした。90年代当時市内にあった保護所は33施設 (この種の最初の施設は1838年開設) で、この協会によると世紀変わり目の数年これら保護所に収容されていたのは平均して約5000人、1903年の数字では、38施設 (4-7歳)、7000人近い数にのぼっていた。<sup>52)</sup>

ワルシャワは、当時、工業化と都市化を背景に急激に人口を膨張させていた。ワルシャワの人口は1882年の382,964人から1897年には624,189人へと急増し、そして1914年までに884,584人にまで増大していく。1880-90年代の前者二つの年というワルシャワ市出身者の割合は52.6%と50.4%であり、残りは市外からの出身者であった。1882年から1897年にかけてその内訳は、市周辺出身者が11.3%から14.0%へ、他ポーランド「王国」地域出身者が26.9%から22.9%へ、他ロシア帝国出身者は5.6%から10.9%へと、はるか遠く「周辺」地域からの人々を含め人口はこのワルシャワに集中する傾向にあった<sup>53)</sup>。労働の場につけない流入人口はますます貧民街を増大させていた。

さて、「貧しき人々、ヴィクトル・ユゴーの小説」紹介の後、その年1899年の12月に「19世紀隣人愛思想の発展」が発表される。この論文の構成は「貧しい人々」・「女性たち」・「子どもたち」となっている。なぜこのような構成になっているかこれまでの研究

で言及しているものはないが、おそらく、『レ・ミゼラブル』の序文にある「世紀の課題」の三つに対応させているものだと考えて間違いない。彼は、「貧しさゆえの人間 (c/howick) の墮落、飢えによる女性の墜落、暗愚ゆえの子ども達の破滅」というユゴーのいう「(19) 世紀の三つの課題」への対応・対策を「19世紀隣人愛\*思想の発展」の名のもとに示そうとしていたのである。彼は、当時ワルシャワ慈善協会に加わって、これらの「三者」を目のあたりにし、できうる限りの活動も行っていた。最初の章にあるのは「貧しい人々」に対する「天からのパンと思想」提供による物質的・精神的支援である。それは具体的には夏期コロニーや身体麻痺者、聾啞者、盲人のための施設や捨児施設の保障、さらに病院や保養所、医者への無料支援など医療支援、また、種々衛生対策、保育所、保護所、製縫工場など保護事業さらには日曜学校、民衆大学、無料読書会、民衆演劇、絵画博覧会、講演といった教育啓蒙事業による精神的支援であった。また二つ目の「女性たち」の章では、主としてその労働と社会的自立、またその地位の確立や「権利」の保障について、そして最後の章「子どもたち」についてはすでに見てきたように「人間」としての「尊重」という新たな子どもへの認識態度の確立によるものであった。これらの「世紀の課題」解決に向けての彼の宣言であった。

\*コルチャックの論文名の冒頭に付された「隣人愛」の意味についてだが、コルチャックのその意図についてはなお筆者は特定しえていないが、しかし単なる宗教道徳上の言説よりは、次のようなユゴーの作品との関係の文脈に注目したい。フランス本国では、『レ・ミゼラブル』に対して、60年代その発表直後にボードレールが「本書は隣人愛の書、つまり、隣人愛の精神を呼びさましかきたるために書かれた書物である。・・・」との書評を書いていた<sup>54)</sup>。

そして何よりも、コルチャックはすでに見てきたように、ユゴーのいう三つ目の課題を自らに引き受けようとしたのだと思われる。彼は目の前で増大する孤児をはじめとする社会的な境遇の劣悪な子どもたちへの救済・支援のあり方について、当時すでに開始されていた医者たちの衛生運動・児童養護事業を背景にしながら<sup>55)</sup>、彼なりのおそらく根本的な対応のあり方とその思索の方法を考えはじめていたのである。彼は、翌年、先に触れた「子どもと教育」の別の記事として文献紹介をしている。それはすでに20年近く前に出版されたものだが当時の児童保護・養護事業の全貌をとらえうる文献『子どもたちの不幸』(1882年)についての紹介である<sup>56)</sup>。国家の福祉事業がほとんど展開しない植民地下ワルシャワにあって、19世紀後半から慈善事業としての子ど



も養護、衛生保護、健康維持管理のための医者たちの私的なあるいは団体としての活動が展開されていた<sup>57)</sup>。その歴史は19世紀から後の20世紀の後半にいたるまでいくつかの体制転換を経ても連続して続く息の長い活動だがそういった伝統の中にコルチャックがいたことも確認しておく必要がある。

さらに、彼は実践的に学び始めていた。大学に入ってからコルチャックは、貧民街の世界にかなりの程度踏み込んで生活するようになりそうすることで、後に回想するところだが、人々の困難な暮らしをようやく理解し始めていたという。なぜ健康が維持できず、なぜ十人の子どものうち四人ほどしか生き残れないのか、そういう現実を理解できるようになったと。しかし問題はいかにその四人の「子どもを大きくして、力をつけてやれるのか」ということだった<sup>58)</sup>。1899年夏にはペスタロッちに学ぶためにスイスに旅行したというのは有名な話であるが、いかに養い育てることができるのか、それはやはりペスタロッチらの経験に学ぶよりなかった。浮浪児・孤児たちを主題とした『街頭の子どもたち』のなかで語っている。やはり「自然」に学びながら。

「自然、これは偉大なる職人である。“自然と生命の子”、その魂は、これは複雑で入り組んだ魂である。したがって並外れた人々だけが、自然の授業のもとで、競い合いその子どもたちの魂のもとにたどりついたのである。・・・このことをスイスのペスタロッちに、そして、ドイツのフレーベル、フランスのマリ・カルパンティエに学ぶことを知った」<sup>59)</sup>（『街頭の子どもたち』1901年）

生き残れた子どもを大きくして、力をつけること、これは将来次のような言葉に置き換えられて生涯の仕事となるのだろう。

「医者、子どもを死の淵からひきずりあげた。教育者の役割は、彼が子どもであることの権利を保障することだ」（『子どもの尊重される権利』1929年）

## まとめと展望

以上のことをふまえ、今後の研究の方向を展望してみたい。

- ①「19世紀隣人愛思想の発展」に見られる子どものなかの「自然」と「人間（性）」の探究という姿勢、子ども研究の方法は、彼の仕事の先行者、ペスタロッチ、フレーベル、スペンサーら19世紀の教育家たちの仕事を受け継ごうとするものであった。
- ②それを大筋で受け継ぎながらも、コルチャックは

彼の時代の医学をはじめとする新たな科学・学問の方法によって子どものなかの「自然」を見つめながら、あくまでも子どものなかの「人間」（人間性）を探究しようとしていた。ひとことでいえば、大人との対等なしかし質的には異なる人間的価値の発見と人々によるそれらの承認をめざして、それは生涯続けられる（コルチャックの子どもの権利に関する議論はこういった文脈で現れてくると考えなければならない。新教育の伝統を引き継いだ子どもの権利論はわが国でよく知られているがコルチャックのそれはその歴史的な脈と異なるものであろう）。

③この探求は、広くヨーロッパの、ユゴーのいう「世紀の課題」のひとつとしての孤児の問題を解決することと重なっていた。それは、世紀転換期、親が子どもを手放す、放置するという問題をどう考えたら良いのか、子どもは本来どのように養い育てるべきなのか、親子の関係はどうあるべきか、おそらくこれらをその根本から考えるとき、これは将来の『子どもをいかに愛するか』（家庭の子ども編）という主題となっていくように思われるが、おそらくこの段階ではまだ意識されない仕事であった。

④というよりむしろ、彼がしなければならないのは、具体的に目の前にあるポーランドの孤児の問題を社会的にも実践的にも解決していくことであった。「街頭の子どもたち」、「家庭のなかの孤児たち」、「不幸な子どもたち」にいかに対処していくか、彼らのなかに「人間」を探究しながらである。若い学生期を脱して、作家として、あるいは医者として、あるいは孤児院院長として、それぞれの“子ども”と向き合いながら、社会にどのように働きかけるのか、その仕事＝実践が開始される。

本研究は、（平成19-21年度科学研究費補助金（基盤研究C））による研究の成果の一部である。

また本研究は2008年度教育史学会（青山学院大学にて開催）における報告をもとに加筆・修正をしたものである。

## 文 献

- 1) チェスワフ・ミウォシュ『ポーランド文学史』未知谷2006年、pp.467-468；Mił. OSZ. Czesław : Czesław Miłosz o Januszu Korczaku // Ruch Pedagogiczny. - 1998, nr. 3/4, s. 111-113.
- 2) 拙著『コルチャック 子どもの権利の尊重』子どもの未来社2004年、p.58 参照。
- 3) 拙稿；地下学校の教師－19世紀後半－20世紀初頭ロシア帝国領ポーランドの教育（『国家・共同体・教師の戦略－教師の比較社会史』、昭和堂2006年2月）参照。

- 4) ミウォシュ前掲書, pp. 524-525, pp. 467-468
- 5) 彼女は90年代有名な童話「小さな妖精と孤児マリシャ」(1896)の他、子どものための多くの本を書いている。『小さな読者さんの楽しい時間』(1889), 『春と子ども、新しい本』(1890), 『幸せな世界、子どものための本』(1895)など (Janusz Korczak, Diela, t. III-cz.1, s.460.)。
- 6) Kalina Batnicka, Irena Szybiak, Zarys historii wychowania, Warszawa, 2001, s. 183.
- 7) Lewin, A., Korczak znany i nieznany, Warszawa, 1999, s. 183,
- 8) ダヴィドによる1896年の子ども研究の最初の書『子どもの知的蓄積』、また、その弟子のアニエラ・シツェヴァ(1864-1921)による1899年の6-12歳の『児童の概念の発達』がポーランド心理学研究の最初の仕事といわれている。これらは、ポーランド人の様々な学校普及や教育者の要求、期待に応えるべき仕事をしたといわれている(以上、Ryszard Wroczynski, Dzieje oświaty polskiej 1795-1945, Warszawa, 1980, s. 257-258)
- 9) Janusz Korczak, Diela, t. III-cz. 1, 1994, Warszawa, s. 227.
- 10) Lewin, A., tamże, s. 238.
- 11) Janusz Korczak, Diela, t. IV, 1998, Warszawa, s. 151.
- 12) Janusz Korczak, Diela, t.VII, 1993, Warszawa, s. 15
- 13) Myśl pedagogiczna Janusza Korczaka, Nowe źródła, wybór Maria Falkowska, Warszawa, 1983, s. 75
- 14) Janusz Korczak, Diela, t. III-cz. 1, 1994, Warszawa, s. 227
- 15) Janusz Korczak, Diela, t. IV, s. 170.
- 16) R.H. クイック (1831-1891)、イギリスの教育家、文法学校教師として実践経験があり、本書の初版は1868年に出版、1881年からケンブリッジ大学で、教員養成に関わり、教育学史を講義。1890年に、本書第二版出版。Janusz Korczak, Diela, t.VI, s.435; The Dictionary of National Biography, Vol XVI, Oxford University Press, London, p.546; Oxford Dictionary of National Biography, vol.45, Oxford University Press, London, p. 678.
- 17) Reformatorzy wychowania : zasady wychowania nowoczesnego/R. H. Quick; przeł. z ang. J. Wł. Dawid, Warszawa, 1896.
- 18) Lewin, A., tamże, s. 176-7.
- 19) Reformatorzy wychowania, s. 425. この原典、Essays on educational reformers, by Robert Herbert Quick, 1890, London (これは1868年の初版を大幅に改訂した第二版)を見ると確かにコメンスキー、ロック、ルソー、バセドー、ペスタロッチ、フレーベル、スペンサーの各章が並ぶ。また、この結論の目次(ポーランド語版にはこの詳細な目次はない)を引用すると、「・・・教育の科学の創始者コメニウス、・・・観察と追跡をめざすルソー。・・・“新教育”はルソーによって開始された。導

き出されていること 人間と他の動物。直感 有機体としての人間、行動家であり創造者。旧教育と新教育の対照。採掘が必要だ、これら思想家は私たちのために何をしているか」とある (p.xxxiv)。

以下に、同書の結論に関わる部分の文章を一部抜粋しておこう。英語原典 pp. 522-523。

31章では“新教育”はルソーにはじまり、ペスタロッチ、フレーベルらによってさらに準備されながら生まれてきたと述べたうえで、旧教育と新教育が次のように対比させられている。「旧教育はひとつの目的を有する、それは学ぶことだ。人は学ぶ存在であり、記憶する存在なのであった。・・・新教育は人間存在を、学ぶ人というより行為者や創造者として取り扱う。教育者の目はもはやその客体たる知識ではなく、主体たる、教育される存在に向けられる。教育の成功は、教育されるところのものを知ることによって決せられるのではなく、彼らが為すところのもの、彼らが在るところのものによって決せられるのである。彼らが善く教育されるのは、彼らが良いと思うことを愛しているときで、それをやるのにふさわしく心と体のあらゆる能力が発達するはずのときなのである。」これに続くのが次の32章の文章である。「新教育とは、ここでは、”受動的、追隨的”であり、人間の自然の研究に基づかなければならないのである。われわれがその発達させられるべき能力が何であるのかを確かめることができるときには、われわれはさらにそれらを発達させるところの自己活動をどのように助成するのかということを考究しなければならぬのである。」

- 20) O wychowaniu: umysłowym, moralnym i fizycznym/Herbert Spencer; przeł. Michał Siemiradzki. Warszawa, 1884, Wyd. 3, s. 204. 英語原典は1884年のものを参照した。Education, intellectual, moral, and physical. by Herbert Spencer, New York and London, 1884 (1861), p. 225. 訳は以下を参照した。H. スペンサー著、島田四郎訳『教育論 (西洋の教育思想14)』玉川大学出版部、1981年、187ページ。英語原典では、「・・・要するに、あなたはあなたの子どもを教育すると同時に、自分自身のより高度な教育を行わなければならないだろう。知的にはあなたはあのもっとも複雑な題目—すなわち、あなたの子どものなかに、あなた自身のなかに、さらに世の中に示されている、人間の自然やその諸法則を、効果的に開墾していかなければならない。」下線部は“You must cultivate to good purpose that most complex of subjects — human nature and its laws, as exhibited in your children, in yourself, and in the world”となっている。
- 21) ここでの記載はすでに書いたことと重なる。拙稿参照、“ヤヌシュ・コルチャックの子ども観と子どもの権利尊重の思想”〔市立名寄短期大学紀要 vol.40, 2007〕。
- 22) Janusz Korczak, Diela, t. VII, 1993, Warszawa, s. 30.
- 23) Tamże, s. 30-48.

- 24) 拙著『コルチャック 子どもの権利の尊重』70-71 ページ参照。
- 25) Tamze, s. 145.
- 26) Tamze, s. 387. ヤヌシュ・コルチャック著『教育の瞬間』（資料紹介：塚本智宏、塚本智宏／鈴木亜里共訳）〔名寄市立大学紀要 vol. 2, 2008〕
- 27) Janusz Korczak, Pisma wybrane, t. II, 1978, Warszawa, s. 141.
- 28) Janusz Korczak, Diela, t. VII, s. 150.
- 29) Tamze, s. 216.
- 30) Lewin, A., tamze, s. 238.
- 31) Tamze, Janusz Korczak, Diela, t. X. s. 18.
- 32) Janusz Korczak, Diela, t. VII, s. 211.
- 33) 世界新教育運動選書 21 クラパレード『機能主義教育論』（原聡介他編訳）明治図書 1987 年, 182 ページ。
- 34) R. Segit, O powrot do mysli pedagogicznej z przełomu wieków XIX i XX, Od pedagogiki ku pedagogii, podred. E. Rodziewicz M. Szczepskiej – Pustkowskiej, Torun 1993, s. 99)
- 35) 「教育は生活か生活準備か」1930（前掲『機能主義教育論』）から以下引用する部分は、コルチャックが『子どもをいかに愛するか』や他の作品、例えば“理論と実践”で議論されている内容や議論と酷似している。先の1904年リセ教授ブルム報告のなかにある「ありのまま」の子どもへの注目や1926年ボピットの全米学会での発言で「教育の直接的な目的は現在」にあり、「未来のために現在を犠牲にしてならない」とすることなど、コルチャックの子どもの権利論に連なるものがある。
- 36) ドイツで最新の研究は、コルチャックへの新教育の影響について、これが二人の女性教育家・医者を通してであったことを明らかにしている。Malgorzata Sobecki „Janusz Korczak neu entdeckt. Pädologe und Erziehungs reformer ; 2008 Malgorzata Sobecki „Janusz Korczak new discovered. A Pedologue and reformer of education Participation paper at the International Korczak 2010.
- 37) 『子どものしあわせ』（草土文化）No.703 と No.712 の拙稿「コルチャック先生と子どもの権利」参照。
- 38) Lewin, A., tamze, s. 183.
- 39) 前掲『機能主義教育論』、167-169 ページ
- 40) 同上、169 ページ
- 41) Janusz Korczak, Diela, t. IV. s. 151-152.
- 42) Janusz Korczak, Diela, t. VI. s. 155. また、この同じ日のこととして、Wanda 夫人がクイックの『教育の改革』という本の提供を約束してくれたとも書いてある。すでに見たクイックの本のことである。談話のなかで登場したのであろう、これらの先人の列举が、クイックの著書（1896）によるものであることはすでに明らかだが、この翻訳は、すでに、ダヴィド編集の隔月誌『教育評論』に連載していたものであったという。また、J. J. ルソーのことは、すでにこの時点の会話で否定的な存在となっていたようだ。「ルソーはいかにして偉大な教育家と名づけることが可能なのか、そう名づけられるためには彼自身道徳性の理想でなければならないのだが、そうでなければ模範にはなりえない」と。
- 43) Tamze, s. 151-2. ドイツの詩人の作品。Friedrich Spielhagen (1829-1911), *Natury zagadkowe. Romans*, T. 1-4, 1880, Warszawa.
- 44) 鹿嶋茂『「レ・ミゼラブル」百六景』、文芸春秋、1987 年 108 ページ。
- 45) 岩波文庫『レ・ミゼラブル（四）』、37 ページ。
- 46) Janusz Korczak, Diela, t. VI, s. 434.
- 47) Janusz Korczak, Diela, t. III, wol.1, s. 491.
- 48) Tamze, s. 195-197.
- 49) Janusz Korczak, Diela, t. III-wol.1, s. 195-197. ユゴーの『レ・ミゼラブル』の序章について、日本の翻訳の多くが第一の課題のなかの「人間」を、男と訳している、簡単に列記しておく。辻昶とおる訳（2000.7）潮出版社、『ヴィクトル・ユゴー文学館』第二巻。坪井・宮治訳（1981.1）集英社、『世界文学全集 27』。井上究一郎訳（1980.11）河出書房、『世界文学全集 32』。佐藤朔訳（1967）『レ・ミゼラブル（一）』新潮文庫。フランスの教育学者 J. スニーデルスの邦訳『わが子を愛することはたやすいことではない』に、ガヴローシュを登場させて浮浪児に関して議論を展開する章がありユゴーの同じ箇所の引用がある。この訳は「すなわちプロレタリアに見られる人間性の荒廃と飢えによる女性の退廃と夜の生活からくる子どもの衰弱」となっている（ジョルジュ・スニーデルス（湯浅・細川訳）『わが子を愛することはたやすいことではない』法政大学出版局、1985 年、p.194.）。
- 50) Cz. Kustra, *Powsciagliwosc i praca w wychowaniu czlowieka*, Torun, 2002, s. 28.
- 51) Erich Dauzenroth, Janusz Korczak, *Życie dla dzieci*, 2005, Kraków (tytuł origin, *Ein Leben für Kinder*, Janusz Korczak *Leben und Werk*, 2002, s. 14-15.
- 52) D. Kaluzniak, *Gneza opieki nad dzieckiem i higiena wychowawcza na przełomie XIX i XX wieku*, <Istoryk wywhobacze> s. 68-69.
- 53) Stephen D. Corrin, *Warsaw before the first world war, 1880-1914*, New York, 1989, pp. 142-144.
- 54) 辻昶の「ボードレールの『レ・ミゼラブル』評」（『河出世界文学大系月報 32』ユゴー I、p3.）
- 55) 前掲論文注 48 論文、並びに、以下を参照。M. Balcerek, *Rozwoi opieki nad dzieckiem*, Warszawa 1978.
- 56) この文献紹介のなかで、コルチャックは次のようにいう。「表現上、彼らを餓えた子・寒さに震える子・孤児の子と冷淡に言い放つこともできる。がけっして涙なくしてこれら不幸な子どもらの目撃者にはなり得ない。」（Lewin, A., tamze, s. 196 ; Janusz Korczak, Diela, t.



IV, s. 157.) 本書の目次 (Diela, t. IV s.524-525.) には、  
モルデンハーベル (1840-1909) ー法律家、社会事業家、  
児童労働問題に関与、ロマン・ヴィエシフレイスキ  
(1825-1887) ー法律家で、『女性の権利』(1882) の著  
者、スタニスワフ・マルキエヴィッチ (1839-1911) ー  
ワルシャワの医者、ワルシャワ夏期コロニーの創設者、  
ヴィクトリン・コスモスキ (1849-1930) ーワルシャワ  
他の小児科医、夏期コロニー活動、児童の健康・衛生保  
護に関わる活動家、論文「ワルシャワ貧困階級の子ども  
の成長と障害」(1894) 執筆といった当時の子どもの貧  
困・救済事業にかかわった人物の名がある (Tamze, s.  
525-526)。

57) こういった活動のなかには時代を先取りする女医たち  
も少なからず存在した。Anna Tomaszewicz-Dobrska と  
Justyna Budzinska-Tylicka らは、各種の国際大会の開催、  
婦人・児童労働の保護、立法活動、療養・飲酒・婚姻等  
に関わる諸課題に向き合い、また「ポーランド女性同  
権」同盟のなかに加わっていたという。隣人愛思想の  
発展論文の「女性たち」の章に現れる女医はこういった  
人物であり、本論冒頭で触れた女性詩人と同様に、彼の  
周辺には、さらに教育事業に奔走する教育者など、社会  
的に活躍する実に多くの女性たちが存在した。D.  
Kaluzniak, Gneza opieki nad dzieckiem i higiena  
wychowawcza na przełomie XIX i XX wieku, s. 71.

58) モニカ・ペルツ『コルチャック』、ほるぷ出版、1994  
年、29-30 ページ。

59) Janusz Korczak, Diela, t. I, 1999, Warszawa, s. 115

***Original Paper***

## **A historical study on Janusz Korczak' s thoughts about children and education (1890s-1920s)**

Chihiro TSUKAMOTO \*

Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University

**Abstract:** This study examines to analyze the process of formation of Janusz Korczak' s thoughts about children and education on the historical background around the turn of 19c.-20c. He is the object of attention as a frontier of the child right thoughts worldwide. The following should be concluded. Succeeding to predecessors' thoughts (Frobel and Pestalozzi and others) about children and education, keeping hold the belief in the core of his thought, " The child is already human" and comparing his thought with thoughts of "New education" of Europe and America, he had searched for his own educational thought which had the basic thought of child- respect as a human, and had attempted to achieve it in his educational practice all his life.

**Key words:** Janusz Korczak, children' s rights, image of childhood, human rights, child-respect

---

Received November 1, 2010; Accepted January 24, 2011

\* Corresponding author (E-mail: tukamoto@nayoro.ac.jp)